



＜念ずれば花ひらく＞

＜坂村 真民先生 プロフィール＞

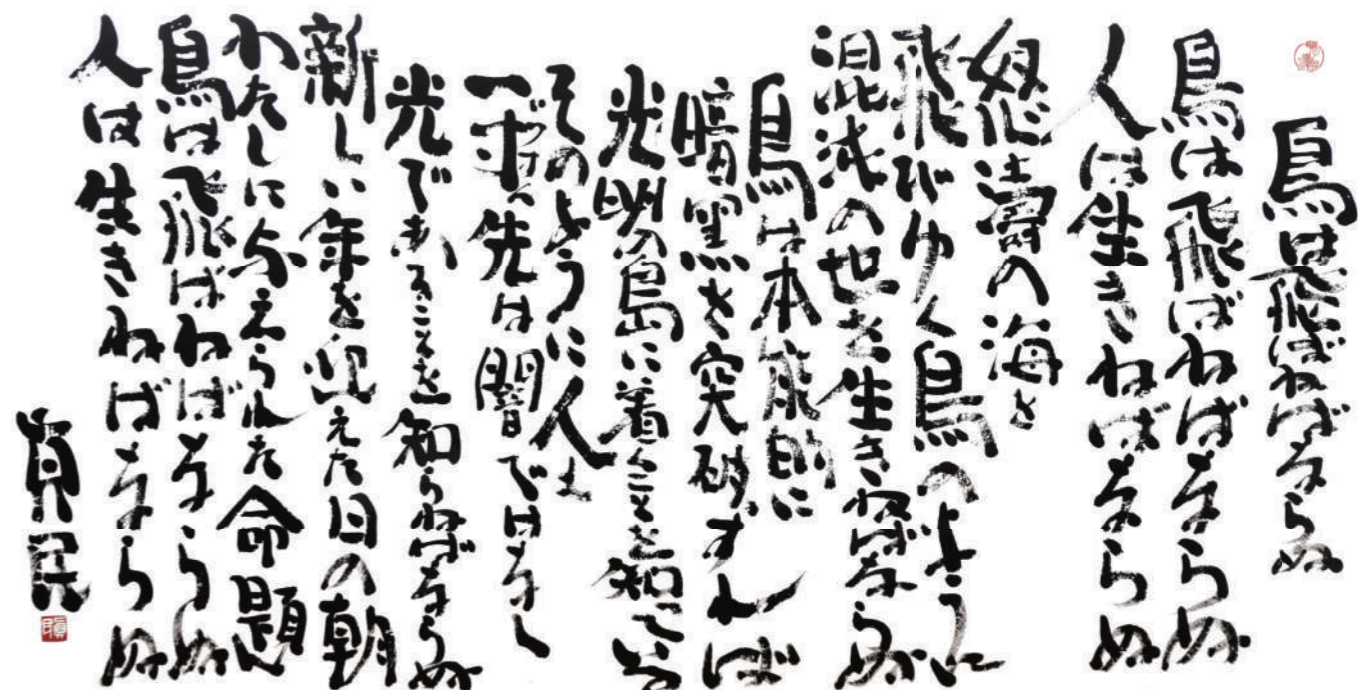
1909年(明治42年)1月6日、熊本県に生まれる。  
8歳の時、父親の急逝によりどん底の生活に落ちる。5人兄弟の長男として母親を助け、幾多の困難と立ち向かう。  
昭和6年、神宮皇学館(現皇学館大学)を卒業。25歳の時、朝鮮にて教職につき、36歳、全州師範学校勤務中に終戦を迎える。昭和21年から愛媛県で高校の国語教師を勤め65歳で退職、以後詩作に専念する。四国移住後、一遍上人の信仰に随順して仏教精神を基とした詩の創作に転じる。詩の愛好者によって建てられる真民詩碑は、700碑を越え日本全国から海外にも及んでいます。人々に「生きるための言葉」をたくさん残され、2006年(平成18年)に97歳で永眠されました。

＜徳真会グループとのかかわり＞

1991年(平成3年)の徳真会グループ創業10周年を記念し、旧新津市(現新潟市)秋葉山に全国で171番目となる「念ずれば花ひらく」の石碑を建立、寄贈。当時82歳の坂村真民先生に遠路四国よりお越しいただき、石碑に入魂式を執り行いました。その後も当グループ代表 松村博史と親交が深く、徳真会グループの各医院には特別に、真民先生の数々の書を飾らせていただいております。  
代表 松村と坂村真民先生の交流は、晩年まで続いていました。そして先生没後も、坂村真民記念館の館長を務められる三女の真美子さん御夫妻との交流は続いています。

# 鳥は飛ばねばならぬ

— 一途に生きる —



＜坂村 真民先生 82歳 直筆の書(1991年)＞

混迷の時代が続いています。  
指導者に必要な要件は、「方向性を指し示す」ことに有る筈ですが、今日多くの指導的立場の人が眼前の利害に振り回され、不屈の信念を持たず、中長期的なビジョンを明確に示す事も出来ず、決めた事を実践する実行力にも乏しい人達が増えてきている様に思います。こうした時代の中では、個人としてもぶれる事なく自分の道を「一途に生きる」事がより大切になってきている様に思います。  
明日の行方に不安を感じる事の多い時、私は 故 坂村 真民 先生の詩、「鳥は飛ばねばならぬ」をよく読み返し発奮する様にしています。  
人は、人として生まれ、与えられた境遇の中で与えられた命と才能を持って生きてゆかねばならないのですが、生まれた時代、環境、才能は人それぞれで、全てが明るく前途洋洋のものばかりでは無いのが普通ではないでしょうか。  
人は多少の個人差はあっても、矛盾や理不尽な事が多い世の中で生きてゆかねばならないのがいつの世も常だと思えます。一見、目の前は暗黒で先が見えない様に思えても、暗黒を突破すれば明るい未来があると信じて、今をしっかりと生き切ってゆく事の大切さをこの詩は教えてくれます。

今日の日本そして世界の世相を観て、未来が不透明で多難な方向に向かっている懸念はぬぐえませんが、いつの時代も常にさまざまな問題が有った訳で、その中で人は逞しく生きて、今日まで命をつないできた訳です。  
我々はそれぞれの分野で、明るい未来を創るべく、年齢や立場や職業に関係なく、今を真剣に生き切ってゆきたいものです。その事がきっと混迷の日本を再び、活力有る国家へと復活させてゆくと考えます。  
生きる事に疲れた時、私はこの詩から幾度も生きて再び挑戦する勇気と決意を貰ってきました。

徳真会グループ  
代表 松村 博史